

研究論文 (Articles)

女子青年の「年をとること」に対する意識と未来展望¹⁾

宇都宮 博

(立命館大学文学部)

Awareness about Aging and Future Perspective among Adolescent Women

UTSUNOMIYA Hiroshi

(College of Letters, Ritsumeikan University)

The present study examined the influence of awareness about aging on future perspective (goal orientation and hope) among adolescent women. A questionnaire was completed by 327 college and junior college students, mean age 19.3 (SD=2.23). Factor analysis on awareness about aging yielded 3 factors, "Physical and intellectual decline", "Social disengagement", and "Maturity/integrity". "Social disengagement" was associated with decreased goal orientation and hope, whereas "Maturity / integrity" was associated with increased hope. In addition, different types of awareness about aging were found through cluster analysis. The implications of these findings were discussed in terms of aging education for adolescents.

Key words : awareness about aging, future perspective, adolescent women

キーワード : 「年をとること」に対する意識, 未来展望, 女子青年

問 題

青年のエイジングに対する意識は、他世代とくに高齢者への理解や共生のあり方を左右する一因として注目されている。そのため、エイジング教育は、高齢者あるいは高齢社会に関する教育という性質が強い(谷口, 1999)。青年を対象とするエイジングにかかわる調査の多くは、高齢者や老いに対する意識や態度について

であるが(例えば、保坂・袖井, 1988; 古谷野, 1990), 古谷野(2003)は高齢者観が最も否定的になるのは青年期であると指摘している。また、辻(2000)は、青年の高齢者に対するイメージには①好意的にみようとすタイプ, ②好意的な面と否定的な面の両方を示すタイプ, ③否定的にみるタイプ, ④差別的な感情を示すタイプがあるとして、個人差に注目する必要性を示唆している。

一方、堀(1985)は、エイジングが加齢という比較的中性的に用いられる場合と、老いや老化という意味合いで用いられる場合とがあるとして、大学生と高齢者の「年をとること」と「老いること」をめぐる意識の違いを比較検討して

1) 本研究は、平成14年度高等教育研究改革推進経費により行われた「学生の多様な興味関心に応えるための大学授業改善プログラム開発」(研究代表者:湯川聰子)の一部である。

いる。その結果、大学生は「年をとること」を肯定的に、また「老いること」を否定的にとらえる傾向が示された。さらに、高齢者とは対照的に「年をとること」と「老いること」を同様のものとはみなしていないことも明らかにしている。この結果をふまえ、堀(1996)は、大学生には「年をとること」に対し、社会生活が広がるという実感を持ちやすいのかもしれないと指摘している。

このように、「年をとること」に関する意識は、自己の人生に対する姿勢、とりわけ未来展望に重要な意味を有しているのではないかと考えられる。アイデンティティ危機の生じやすい青年期において、「年をとること」に関する意識は、自己の有限性を自覚させ、結果として未来展望を左右する一因となっていることが推測される。ただし、その影響のあり方は一様ではないと予想され、「年をとること」に関する意識を明確にもつ場合であっても、否定的側面は未来展望を抑制し、対照的に肯定的側面は促進的に作用すると考えられる。

ところで、無藤(2000)は、女子が男子に比べて、自己の身体的外見をめぐる、危機的状況に陥りやすい点を指摘している。このことに関して、例えば青年後期の女子は、同時期の男子よりも身体的満足度が低いこと(田場・倉戸, 1995)や、ステレオタイプな性役割に同調する女子ほど身体的満足度が高いこと(伊藤, 2001)、さらには身体的満足度の低さが摂食障害傾向と関連していること(鈴木・伊藤, 2001)などが報告されている。女子青年にみられる、自己の外見や他者評価への敏感さの背景には、少なからず「女性は若く、美しくなければならぬ」といった社会的プレッシャーが関与しているのではないかと推察される。

したがって、女子青年のエイジングに対する意識と未来展望との間には、密接な関連があると予想される。とりわけ「年をとること」に対

する否定的な受け止めが注目される。エイジングによる衰退的変化を強調する女子の場合、過度な恐怖心や抵抗感が生じやすく、未来展望が消極的になっていることが考えられる。ただし、女子青年の間でも、肯定的変化の受け止めが優位な者や、そもそも「年をとること」に対して無関心な者もいると考えられ、女子青年における「年をとること」に対する受け止めには個人差があると推測される。

以上をふまえ、本研究では、エイジングの中でも「年をとること」に対する意識に焦点を当て、それが女子青年の未来展望に与える影響について検討することを目的とする。具体的な分析課題は次のとおりである。

- ①女子青年の「年をとること」に対する意識の構造について検討する。
- ②「年をとること」に対する意識が女子青年の未来展望に及ぼす影響について検討する。
- ③「年をとること」に対する意識による女子青年の類型化を試み、各タイプの未来展望の特徴について比較検討する。

なお、青年期を対象に「年をとること」に対する意識と未来展望の関連を検討する際には、やはり青年期の現実生活がいかに充実しているかといった、現在展望(白井, 1994)の側面を考慮すべきであると考えられる。そこで、分析課題②に関しては、現在展望の影響力にも注目することとした。

方 法

調査対象者

福岡県内の大学および短期大学に通う女子327名。平均年齢は、19.2歳であった($SD=1.31$ 歳)。

分析測度

時間的展望

時間的展望体験尺度（白井，1994）の現在に関する下位尺度（充実感5項目）と未来に関する下位尺度（目標指向性5項目・希望4項目）を用いた。具体的な項目であるが、充実感は“今の生活に満足している”，“毎日がなんとなく過ぎていく（逆点項目）”，目標指向性は“私には、将来の目標がある”，“将来のことはあまり考えたくない（逆点項目）”，そして希望は“自分の将来には、希望がもてる”，“私には未来がないような気がする（逆点項目）”などで構成されている。回答は「そう思う」，「どちらかといえばそう思う」，「どちらともいえない」，「どちらかといえばそう思わない」，「そう思わない」の5件法で求めた。信頼性係数は，それぞれ充実感 $\alpha = .807$ ，目標指向性 $\alpha = .826$ ，希望 $\alpha = .737$ であった。

「年をとること」に対する意識

堀（1996）がKeller et al.（1989）の調査項目を軸に作成した「年をとること」に関する意識を問う20項目を用いた。「年をとること」に

対する意識についても，回答は「そう思う」から「そう思わない」までの5件法による。なお，因子構造および各因子の信頼性については，後の結果で検証されている。

手続き

自記式質問紙調査を講義時間中に実施し，回収した。調査時期は，2003年7月である。

結果

「年をとること」に対する意識の因子構造

「年をとること」に対する意識の構造を明らかにするため，因子分析（主因子解・バリマックス回転）を実施したところ，固有値の落ち込み状況と解釈のしやすさから3因子が妥当であると考えられた。なお，全20項目のうち，いずれの因子にも低い負荷量を示した6項目がみられた。そこでこれらの項目を除き，再度同様の分析を行った結果が，Table 1 に示すとおりである。

各因子は以下のとおりである。第1因子は“健康状態が悪くなっていく”や“記憶力が悪くな

Table 1 「年をとること」に対する意識の因子分析結果

	因子1	因子2	因子3
1. 「心身の衰退」因子 ($\alpha = .773$)			
人生の残り時間が少なくなっていく	.812	.031	.017
死に近づいていく	.778	.047	.027
健康状態が悪くなっていく	.558	.318	.023
記憶力が悪くなっていく	.476	.236	.063
体力が落ちていく	.469	.098	.042
2. 「社会的離脱」因子 ($\alpha = .760$)			
社会生活から離れていく	.099	.728	-.120
人との付き合いが減っていく	.091	.687	-.057
ただ同じような日々の繰り返しになる	.162	.603	-.056
いろいろなものを失っていく	.221	.553	-.089
3. 「成熟・統合」因子 ($\alpha = .636$)			
人間が完成されていく	-.057	.166	.719
より自分らしくなっていく	-.030	-.118	.544
社会生活が開けていく	.022	-.191	.477
大きな変化が待っている	.136	.037	.460
知恵や人生経験が豊かになっていく	.041	-.125	.371
因子寄与	2.14	1.94	1.43
寄与率	15.29	13.83	10.19

っていく”などで構成されていたため、「心身の衰退」因子とした ($\alpha = .774$)。第2因子は“人との付き合いが減っていく”や“社会生活から離れていく”などの項目から「社会的離脱」因子とした ($\alpha = .760$)。そして第3因子は“より自分らしくなっていく”や“人間が完成されていく”などの項目により、「成熟・統合」因子とした ($\alpha = .636$)。

因子間の相関は、Table 2 のとおりである。「社会的離脱」が、「心身の衰退」($r = .320, p < .001$) および「成熟・統合」($r = -.118, p < .05$) と弱い相関が認められた。「心身の衰退」と「成熟・統合」の間には、相関がみられなかった。

Table 2 「年をとること」に対する意識の内部相関

	社会的離脱	成熟・統合
心身の衰退	.320***	.050
社会的離脱		-.118*

* $p < .05$, *** $p < .001$

「年をとること」に対する意識と基本属性との関連

基本属性との関連については、まず親との同居の有無とそこに高齢者（祖父母のうち少なくとも一方）が同居しているか否かに着目した。人数分布は、「親と同居で高齢者あり」が30名、「親と同居で高齢者なし」が93名、「親と別居で高齢者あり」が59名、「親と別居で高齢者なし」が129名である（欠損データ16名）。二要因分散分析を実施したところ、「心身の衰退」で高齢者の有無による主効果の傾向 ($F(1,307) = 3.66, p < .10$) が、また「成熟・統合」で親との同居の有無による主効果 ($F(1,307) = 4.86, p < .05$) が確認された。すなわち、「心身の衰退」は実家に高齢者がいる者ほど高く、「成熟・統合」は親と同居している者ほど高かった。交互作用は、いずれの因子においてもみられなかつ

た。

この他、青年自身の年齢、実家の祖父母の総数および最高齢者の年齢との相関を検討したところ、自分の年齢と実家の祖父母の総数はいずれの因子とも無相関であったが、最高齢者の年齢は「社会的離脱」と弱い正の相関が示された ($r = .283, p < .05$)。

「年をとること」に対する意識と充実感による未来展望への影響

「年をとること」に対する意識が未来展望にどのように作用しているのかを検討するため、「年をとること」に対する意識の3因子と充実感を説明変数、未来展望（目標指向性・希望）を目的変数とする重回帰分析（ステップワイズ法）を実施した（Table 3）。その結果、目標指向性では、充実感と「社会的離脱」が関連していた。このうち、充実感は正の影響 ($\beta = .317, p < .001$) を及ぼし、「社会的離脱」は負の影響 ($\beta = -.164, p < .01$) を有していた。

一方、希望においては、充実感と「社会的離脱」に加え、「成熟・統合」も関連していた。このうち、充実感と「成熟・統合」は正の影響（それぞれ、 $\beta = .342, p < .001$; $\beta = .106, p < .05$ ）であったのに対し、「社会的離脱」は負の影響 ($\beta = -.185, p < .001$) が認められた。

Table 3 「年をとること」に対する意識を目的変数とした重回帰分析結果

	未来展望	
	目標指向性	希望
心身の衰退		
社会的離脱	-.164**	-.185***
成熟・統合		.106*
充実感	.317***	.342***
調整済み 重決定係数	.153***	.209***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

「年をとること」に対する意識による類型化と各クラスターの未来展望の特徴

「年をとること」に対する意識の各因子の高

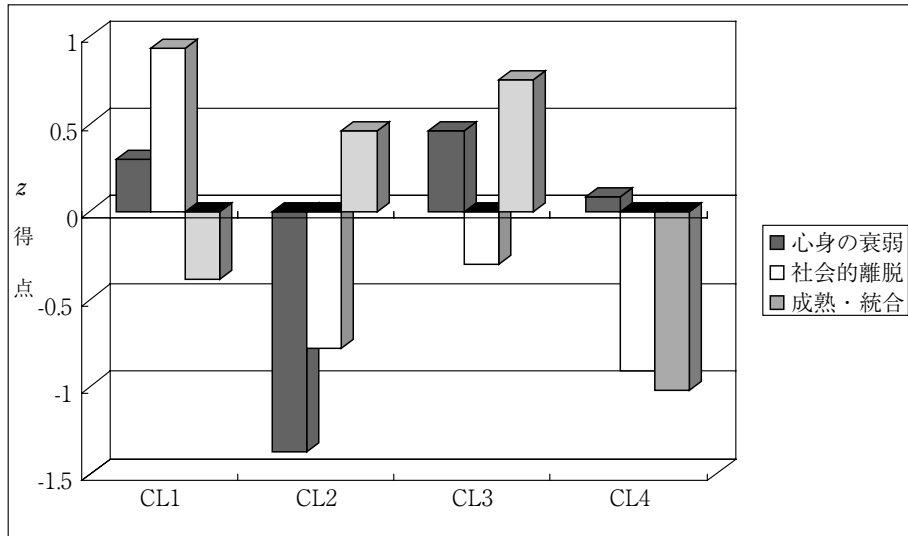


Figure 1 各クラスターの特徴

低や結びつきは同年代の女子であっても個々人で異なる可能性がある。そこで、各下位尺度の項目得点をz得点に変換し、その値をもとにクラスター分析（Ward法）を実施した。解釈可能性の観点から、4つのクラスターが最も適切であると考えられた。なお、このクラスターを独立変数として、各得点についての分散分析を実施した結果、いずれの因子においても主効果が確認された（「心身の衰弱」 $F(3,323)=91.01, p<.001$ ；「社会的離脱」 $F(3,323)=161.22, p<.001$ ；「成熟・統合」 $F(3,323)=74.63, p<.001$ ）。

各クラスターの特徴は、Figure 1に示すとおりである。第1のクラスター（ $n=126$ ）は、否定的側面（とくに「社会的離脱」）が高く、「成熟・統合」が低い群である。第2のクラスター

（ $n=62$ ）は、否定的側面（とくに「心身の衰弱」）が低く、「成熟・統合」が高い群である。第3のクラスター（ $n=92$ ）は、「心身の衰弱」と「成熟・統合」という、否定的側面と肯定的側面がともに高い群である。そして第4のクラスター（ $n=47$ ）は、否定的側面（とくに「社会的離脱」）と肯定的側面のいずれも低い群である。

続いて、これらクラスター間で未来展望に差異がみられるかを、同じく一要因分散分析によって検討した。結果はTable 4に示すとおりである（目標指向性 $F(3,323)=6.81, p<.001$ ；希望 $F(3,323)=8.33, p<.001$ ）。このうち、目標指向性では、CL2がCL3とCL1よりも高得点であった。一方、希望では、CL2とCL3が、CL1よりも高い得点が示された。

Table 4 各クラスターの未来展望の平均値（SD）と分散分析結果

	CL1	CL2	CL3	CL4	分散分析結果	
					F値	多重比較
目標指向性	3.40 (0.92)	4.05 (0.81)	3.60 (0.99)	3.68 (1.05)	6.81***	CL2>CL3・CL1
希望	2.88 (0.85)	3.50 (0.74)	3.23 (0.91)	3.25 (0.81)	8.33***	CL2・CL3>CL1

*** $p<.001$

考 察

本研究では、女子青年のエイジングへの意識について、「年をとる」という視点からその構造を分析するとともに、「年をとること」に対する意識が彼女らの未来展望（目標指向性・希望）に与える影響について検討した。以下、検討課題の順に考察を行っていく。

まず、「年をとること」に対する意識は、因子分析から多次元からなることが示された。すなわち、「心身の衰退」、「社会的離脱」、「成熟・統合」の3因子である。このうち、はじめの2因子は何かを喪失するといった、彼女らに否定的に映っていると思われる内容であった。「心身の衰退」は“健康状態が悪くなっていく”や“記憶力が悪くなっていく”といった項目に代表されるように、基本的に個人内で生じる事象であると考えられる。一方、「社会的離脱」は“人との付き合いが減っていく”や“社会生活から離れていく”などから構成されていることから、社会の相互交渉にかかわる事象であり、後者はまさに離脱理論 (Cumming & Henry, 1961) の構成要素といえよう。

残りの「成熟・統合」は、“より自分らしくなっていく”や“人間が完成されていく”など、年を重ねるがゆえに何かを獲得できるといった肯定的変化を意味する項目から構成されていた。その中には、Erikson (1950) のアイデンティティや統合性、Horn (1970) の結晶性知能の概念とかかわりのある、いわば個性化を生み出す要素も含まれていた。

ところで、肯定的変化に関しては、個人レベルに関する項目と相互交渉レベルに関する項目が同一の因子に位置していた。このことから、否定的変化ほど具体的にイメージしにくいことが推察される。またその一方で、「成熟・統合」に関しては、個人レベルの事象と相互交渉レベ

ルの事象とが不可分な関係にあるとの認識を有していることも考えられる。

これら3因子と基本属性との関連を検討したところ、実家に高齢者がいる青年の方が、「心身の衰退」を認知していた。また「社会的離脱」については、実家の高齢者が長寿であるほど、強く認知する傾向がみられた。「成熟・統合」は、親と同居している者の方が高かった。

したがって、「年をとること」に対する意識は、高齢者と関わる機会が多いほど否定的側面が焦点化されやすく、中年期に位置する親と接する機会が多いほど肯定的側面に目が向けられるのかもしれない。この点は、「老いること」への意識と大きく異なる点であろう。すなわち、「年をとること」についての意識は、「老いること」への意識とは対照的に、想定範囲の自由度が大きく、どのライフステージを連想するかによって、受け止め方がかなり異なってくるものと推察される。いずれにせよ、実際には両親や祖父母の身体的状況やパーソナリティ、幸福感、それに青年自身との人間関係などの要因も関与していることが予想され、さらなる検討が必要であると考えられる。

では、「年をとること」に対する意識は、女子青年の未来展望（目標指向性・希望）にとって、どのような意味を有しているのであろうか。「年をとること」に対する意識と、現在展望の指標である充実感を説明変数とする重回帰分析を行ったところ、注目すべき結果が示された。すなわち、「社会的離脱」は目標指向性と希望のいずれにも、有意な負の影響を及ぼしていた。これから社会の様々な場を通して自己実現を目指そうとする女子青年にとって、年をとることのできた活動が制限されていくと考えることは、自分の未来に目を向けることを躊躇させるのかもしれない。そのため、「社会的離脱」が強調されると、未来展望が停滞し、刹那的な現在展望に陥る可能性があると考えられる。

対照的に「成熟・統合」は、希望においてのみであるが、正の影響力が確認された。したがって、「年をとること」に対し、「成熟・統合」の視点を有することで、女子青年の未来展望（希望）が促進されるのではないかと考えられる。3つの因子の中でも、とくに「成熟・統合」は、社会的あるいは生物的に規定された、誰もがたどる過程という性質のものではなく、当事者がいかに自分らしい人生を積み重ねていくかによって大きく左右されるため、個人差が大きいといえる。それだけに、青年期には、そうした「成熟・統合」の視点をふまえた未来展望が求められているのではないだろうか。

ところで、当初予想していた「心身の衰退」による否定的影響は、本研究では確認されなかった。これは、女子青年が「心身の衰退」を考える際には、より高齢になった時点を想定しているため、自己の未来展望と結びつきにくかったのではないかと考えられる。今後、青年期を対象に心身の加齢変化を検討していく際には、彼らにとって近い将来である成人初期から顕在化しはじめる事象を取り入れるなど、項目内容の精選が求められる。

本研究では、「年をとること」に対する意識についてクラスター分析を行い、女子青年を類型化した。その結果、大きく4つのクラスターが示された。各クラスターの特徴から、「年をとること」に対する意識は、二つの軸で説明できることが示唆された。すなわち、肯定軸と否定軸であり、4つのクラスターをこの二つの軸からみると、相対的に否定が優位なタイプ（CL1）、肯定が優位なタイプ（CL2）、肯定と否定のいずれも高いタイプ（CL3）、そしていずれも低いタイプ（CL4）であると考えられる。このうち、CL4については、「年をとること」に対する問題意識や関心が比較的低い群であると推察される。

4つのクラスター間で未来展望を検討したと

ころ、CL1の得点が比較的低く示された。このことから、女子青年の未来展望にとって、「年をとること」に対する過度の否定的ステレオタイプをもたせない、さらにはそれらを払拭するような取り組みが必要であるといえよう。しかしながら、一方で肯定的側面だけに目を向けさせるなど、いわゆる「年をとること」の光の部分だけを強調することも、非現実的な未来展望を抱かせることにつながる恐れがあり、取り扱いをめぐっては内容のバランスについての十分な配慮が必要とされる。また、CL4のように、肯定、否定を問わず、「年をとること」の意味について積極的に吟味しておらず、漠然としかとらえきれていない者がいる点にも留意しなければならないだろう。

近年、福祉や教育などの分野では、高齢者疑似（インスタント・シニア）体験が注目されている。本研究の結果は、女子青年のエイジング学習へのレディネスに個人差があることを示すとともに、エイジング学習の取り扱いによって、彼女らの未来展望が促進的にも、そして阻害的にも影響される可能性を示唆するものであった。高齢者疑似体験に限らず、今後エイジング教育を進めていく際には、ステレオタイプな高齢者像を植えつけないように配慮するとともに、受講者自身がエイジング過程の主体であることを視野に入れた取り組みが期待されることである。このように、自己との連続性を考慮したエイジング教育プログラムの開発は、今後の重要な課題といえる。また、エイジング教育による未来展望への効果も、早期に検討されるべき課題である。

最後に、本研究では、エイジングの問題として「年をとること」に対する意識に焦点を当て、未来展望との関連について検討してきた。その結果、いくつかの注目すべき知見が得られた。しかしながら、先にも指摘したように、「心身の衰退」については、対象者の属性を考慮した

項目の再検討が求められる。また今回検討していない男子学生との比較や、他の学校段階との比較、さらには親や祖父母との人間関係などの要因との関連も検討すべきであろう。そして、青年期の彼らが将来直面するであろう様々な役割（職業、配偶者、親など）の獲得や喪失をめぐる問題も、エイジングと時間的展望の両面からとらえていく必要があると考えられる。

引用文献

- Cumming, E., & Henry, W. E. (1961) *Growing old : The process of disengagement*. New York: Basic Books.
- Erikson, E. H. (1950) *Childhood and society*. New York: Norton.
- 堀薫夫 (1985) 教育におけるエイジングの問題. 福井県立短期大学研究紀要, 10, 100-101.
- 堀薫夫 (1996) 大学生と高齢者の老いと死への意識の構造の比較. 大阪教育大学紀要 IV, 44(2), 185-197.
- Horn, J.L. (1970) Organization of data on life-span development of human abilities. In L. R. Goulet & P. B. Baltes (Eds.) *Life-span developmental psychology: Research and theory*. New York: Academic Press. Pp.423-466.
- 保坂久美子・袖井 孝子 (1988) 大学生の老人イメージ—SD法による分析—. 社会老年学, 27, 22-33.
- 伊藤裕子 (2001) 青年期女子の性同一性の発達—自尊感情, 身体満足度との関連から—. 教育心理学研究, 49(4), 458-468.
- Keller, M. L., Leventhal, E. A., and Larson, B. (1989) Aging: The lived experience. *International Journal of Aging and Human Development*, 29(1), 67-82.
- 古谷野亘 (1990) 通年講義による老人観の変容—専門科目「老人福祉論」の場合—. 桃山学院大学社会学論集, 23(2), 1-19.
- 古谷野亘 (2003) 高齢期をみる目. 古谷野亘・安藤孝敏 (編) 新社会老年学—シニア・ライフのゆくえ—. ワールドプランニング, Pp.13-26.
- 無藤清子 (2000) 心理臨床的問題にみられるジェンダーの影響. 伊藤裕子 (編) ジェンダーの発達心理学. ミネルヴァ書房, Pp.224-251.
- 白井利明 (1994) 時間的展望体験尺度の作成に関する研究. 心理学研究, 65(1), 54-60.
- 鈴木 幹子・伊藤 裕子 (2001) 女子青年における女性性受容と摂食障害傾向—自尊感情, 身体満足度, 異性意識を媒介として—. 青年心理学研究, 13, 31-46.
- 田場あゆみ・倉戸ヨシヤ (1995) 青年期後期における身体像と自己受容, 他者受容との関係について. 大阪市立大学生生活科学部紀要, 43, 225-236.
- 谷口幸一 (1999) エイジング教育 東清和 (編) エイジングの心理学. 早稲田大学出版部, 89-130.
- 辻正二 (2000) 高齢者ラベリングの社会学—老人差別の調査研究—. 恒星社厚生閣

(2007. 4. 24 受稿) (2007. 7. 31 受理)